

2018年6月17日(日)／説教者：國分美生

説教：「行って、同じようにしなさい」

聖書：ルカによる福音書10:25～37

「聖書の読み方が変わる」。それはこれまでの解釈が間違っていた、というのではなく生き方が変わることで、みことばをまた別の側面から見るように促される豊かな体験です。

「善いサマリア人」のたとえは祭司とレビ人の姿を通して「律法を忠実に守ることで隣人を見捨てる」という矛盾を知らしめます。しかしイエスによると律法全体を貫いているのは「神を愛し、隣人を愛す」ことです。

一方、サマリア人は倒れている人を見てはらわたが千切れるほどの思いに駆られ、近寄って傷の手当てをします。しかもサマリア人はユダヤ人から軽蔑され、差別的にみられていた人々でした。この「サマリア人」は伝統的にはイエスであると解釈されますが、わたくし自身は体験を通して、沖縄とサマリア人が重なって見えます。

北王国イスラエルがアッシリアの捕囚となった時、混交政策によって首都サマリアにはたくさんの異民族が移住しました。もともとユダヤだったのが、支配者の政策によって切り離されました。ユダヤ人は、もはや異民族となっしまい自分たちとは違う宗教を持つサマリア人を軽蔑していました。旧約聖書のエズラ記においてすでにその反目し合う様子が見られます。イエスの時代のサマリア人たちも世代を超えた根深い痛み、傷を負っていたことでしょう。

ユダヤ人に、民族と宗教を飛び越えて寄り添ったサマリア人。もしかすると自分自身が負っている傷があるゆえに、助けを必要とする人の無言の叫びに敏感になれたのかも知れません。

沖縄からは沖縄と福島の連帯がはっきり見えます。沖縄の痛みを語るとき、原発事故で傷ついた福島のこと引き合いに出すウチナンチュ。そして福島からも多くの人が辺野古へ駆けつけています。強制連行によって祖国に帰ることなく死んでいった朝鮮半島の人々を記憶するため、有志によって12年前読谷に恨の碑がつくられました。そのモニュメント制作の思いを託した朝鮮の方は、自分たちと同じく日本の被害者として、沖縄に対して仲間意識を持っていたといいます。

傷を負いながらも沖縄は、「苦しみにあるだれかのすぐそばに、国籍や、民族や、宗教を越え、その人と苦しみを共にして、その人の隣人となる存在として寄り添うことができる」。そのように生きるように神からの力がある。聖書はそのように言っているように思えてなりません。イエスのように隣人に寄り添うことは、人間である私たちには到底できませんが「行って同じように実行しなさい」というイエスの言葉をいつも携えて歩みたいものです。(國分美生)